

第二編

資本の性質・蓄積・運用

序　　論

分業も交換もほとんどない自給自足の素朴な社会では、社会の運行に先立つ資本や備蓄は不要で、人々はその時々必要を自らの労働で賄う。空腹なら森へ狩猟に出かけ、衣が擦り切れば最初に仕留めた大型獣の皮で身を覆い、住まいが傷み始めれば手近な木や芝土で応急修理を施す。

分業が定着すると、自分の産物だけでは需要の一部しか満たせず、残りは他人の産物を自分の産物またはその売上で購入することになる。しかし購買は自分の産物が完成し販売されるまでできないため、当面の生活費と仕事に必要な原材料・道具を賄う蓄えがあらかじめ必要となる。例えば織工は、布が織り上がって売れるまでの生活費と材料・道具が、自分か他者によって前もって用意されていなければ、専業に専念できない。要するに、この蓄えは特定の職に長く従事するための前提である。

原則として、分業の確立には先行する資本の蓄積が不可欠で、蓄えが厚いほど労働の分化は深まる。同じ人数でも分業が進むほど処理できる原材料の量は大きく増え、作業が単純化するにつれて、それを容易にし時間を短縮する新しい機械が次々に生まれる。

ゆえに、一定の人数の労働者に継続的な仕事を与えるには、彼らの食料に加え、初期段階より多い原材料や道具を前もって備蓄しておく必要がある。また、分業の深化に伴い各業種の労働者数も増え、その増加が職務の区分と細分化を支える。

労働生産性を大きく高めるには、前もって資本を蓄えることが欠かせず、その蓄積自体が改良を促す。資本で労働を支える者は、当然ながら最も多くの成果が得られるよう資本を用い、職務分担を適切に整え、自ら発明するか、購入可能な範囲で最良の機械設備を備えようとする。こうした実行力は一般に資本の規模、すなわち雇える人数に比例する。ゆえに、どの国でも雇用に回る資本が増えるほど、労働投入が増えるだけでなく、同じ労働から得られる産出もいっそう大きくなる。

総じて、資本（ストック）の増加が産業活動と労働の生産力にもたらす影響は、おおむね前述のとおりである。

この第二編は、資本（ストック）の性質、多様な資本形態への蓄積が生む効果、ならびに異なる運用がもたらす影響を解説する。全五章で構成し、第一章は個人・社会のストックが自然に分かれる部門を示し、第二章は社会のストックの一部門である貨幣の性質と働きを扱う。資本化されたストックは所有者が自ら運用することも他者に貸すこと

もできるため、第三章と第四章ではこの二つの場合の資本の働きを検討する。最終の第五章では、資本の運用の違いが国民の産業規模と土地・労働の年間産出に直ちに及ぼす影響を論じる。